

プロジェクト科目「地域における歴史資料の保存と公開と活用の実践論」

「受講学生とともに学ぶ：プロジェクト科目「地域における歴史資料の保存と公開と活用の実践論」をとおして」

坂野鉄也 Tetsuya Banno
滋賀大学 経済学部 / 准教授

2015年度秋学期に同僚教員である阿部安成、青柳周一、須永知彦とともに、プロジェクト科目「地域における歴史資料の保存と公開と活用の実践論」を開講した。このプロジェクト科目は学生に何かを教えるということ以上に、参加した教員自身もほかの教員や外部講師あるいは講演者から学生とともに学ぶ、教員と学生とがともに一種の「学びの共同体」を作るという意味で実験的な授業となったといえよう。

「歴史資料」が「地域」においてどのように「保存」され、「公開」あるいは「活用」されてきたのかをテーマとした、このプロジェクト科目は、2015年10月31日の滋賀大学経済学部附属史料館特別展の関連講演会およびシンポジウムにおいて扱われた、長浜市西浅井町菅浦で歴史資料がどのように保存されてきたのかを知ることから始まった。そして、高島市マキノ町知内、長浜市木之本町、彦根城博物館を訪問し、滋賀県内の各地での歴史資料保存の実際に触れた。また大学内でも、附属史料館および経済経営研究所で歴史資料の保存の様子をみ、史料館展示室や「しがだい展示コーナー」、経済経営研究所のデジタル・アーカイブをつうじて、その公開について学んだ。さらに、保存や公開、そして活用に関連した法的な事項、あるいは、水損資料の修復についても学んだ。これらの講義や実習をとおして、モノとしての歴史資料が時代を超えてそこにある、あるいは、未来へと残すために必要な智恵と同時に、歴史資料が「イマ・ココ」にあることの偶然性、そして、「イマ・ココ」にあるものを少しでも多く未来へと残していくことが地域というつながりを喚起することを学んだ。

この授業をとおした「学びの共同体」では、学びの主体は受講した学生にあるだけでなく教員にもあった。通常の講義や実習においては、教員が先達となり学生を導くということになるが、このプロジェクト科目

においては教員といえども学生と同じであった。たとえば、知内を訪問したさいに住民から聞いた語り、自らが残した記録を歴史資料として保存することを意識したとき、先人が残した記録も読み、過去について知りたいと思うようになったという語りは、それを聞いた学生だけでなく教員にも地域住民と歴史資料との関係を考えさせる契機を与えた。もちろん教員、学生の立場の違いは、その契機をどのように活かしていくのかという点での違いとなって現れてくることになるのであろうが、その発言を耳にした場においての驚きは、学生と教員とで大差がない。こうしたことも含め、学生と教員とが体験の共有を繰り返しおこなえたことも、このプロジェクト科目の特徴となる。最初から最後まで教員が学生とともに、同じ体験をしつつ学びの階梯をとともに上っていく。教員が学生といつも同じ景色を見るところによって、学生の学びを教員自らも同じ視点で確認することができた。

歴史資料の保存・公開・活用を核たるテーマとしながらも専門分野を異にする複数の教員が関わり、外部講師を依頼し、あるいは、歴史資料の保存・公開・活用がおこなわれている現場に足を運ぶことで、学生と教員とが「学びの共同体」となることが可能となった。これは予期したものではなかったが、結果として新たな教育実践となったと考えられる。



建物という歴史資料(滋賀銀行旧木之本支店)



水損史料修復ワークショップでの、応急処置の実演(歴史資料ネットワーク・前田結城氏による)。紙製の史料がひどく水濡れした場合は、写真のように史料をペーパータオル(キッチンペーパー)で挟んで水分を吸い取ってから、防カビのために消毒用エタノールを噴霧し陰干する。